

活動ピックアップ!

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS 長岡 みんなのSDGs

長岡地域 Nagasaki
ながおか神輿プロジェクト
神輿の文化を次世代へ



神輿をたくさんの人に知ってほしい、若者に興味をもってほしいという思いから活動を始め、2023年2月に「ながおか冬神輿まつり」を開催。誰でも神輿を担げるように、一般の人が参加できる子ども神輿や神輿渡御、親子で楽しめる縁日やキッチンカーの出店などを企画しました。今後も神輿のシーズンオフとなる冬に焦点を当てたイベントを開催していきたいです。

4 質の高い教育をみんなに
有限会社 吉澤 藤兵衛
「伝える」ことで持続可能な農業に



水稻を中心に米や餅を生産・販売している「吉澤藤兵衛」では、農業や化学肥料を抑えた特別栽培米の生産に取り組んでいます。また地元小学校の出前授業や米作り体験の受入を行い、農業の大切さと魅力を伝えています。教えた子どもたちの中から次世代の地域農業を担う若者が生まれるように、今後も取り組んでいきたいです。

市民活動 虎の巻



研究テーマ 公共施設を使ってみよう!

市内にはどのような公共施設があって、どのように利用できるかご存知ですか?
市民のサークル、非営利団体、公共団体などは無料で使える施設もあります。ぜひ活用してみてください。

Step1 施設を探してみよう!

公共施設の一覧から、使いたい施設を探してみましょう。会議やワークショップとして活用できる会議室、イベントの開催場所として使えるホールなどがあります。
施設によってはプロジェクターやマイクなどの備品を使用することも!
※利用料や貸出備品は施設によって異なります。詳しくは各施設にお問い合わせください。



公共施設ガイド

Step2 借りてみよう!

- 1 電話or窓口で申し込み
- 2 公共施設予約システムから予約



各施設の窓口で利用者登録の申請が可能です。(登録は無料)

協働センター内の協働ルームの予約方法は①のみです。

Step3 使ってみよう!

予約時間前には施設窓口で受付を済ませましょう。事前に書類が必要な場合は忘れずに提出しましょう。

正しく、楽しく利用するためのルール

- 1 貸出備品、施設は丁寧に使いましょう。
- 2 使用後は机や椅子などを元の位置に戻しましょう。
- 3 各施設の感染症対策に従って、安全に活用しましょう。

市民のチカラ



”とくべつ” “を守る”

地域の

知る、つながる、好きになる
ながおか市民活動情報誌



2023
3
vol. 123
Take Free

センターからのお知らせ

あなたの活動をサポート 活動おたすけパッケージ

協働センターが、あなたの活動の広報をサポート!
協働センターに団体登録していただくと、下記のサービスを受けられます。

- 協働センターホームページ「コライト」への情報掲載
 - 団体の基本情報
 - 団体で開催するイベントや講座の情報
 - ボランティアや会員の募集

詳しくは、こちら!

- 「協働マッチングリスト」への掲載
 - 団体の「協力できること」と「協力してほしいこと」をまとめたリストにあなたの団体を掲載



発行

ながおか市民協働センター

〒940-0062
長岡市大手通1丁目4番地10
シティホールプラザアオーレ長岡 西棟3F
Tel. 0258-39-2020
Mail. contact@nagaokakyodo.net



配布場所

長岡市役所及び各支所、サービスセンターの他、市内図書館、コミセン、子育ての駅等、公共施設に設置しています。



ながおか市民協働センター

特集
越後ながおか語り座ネット
山古志角突き女子部

NAGAOKA PLAYERS
西脇 秀和さん

活動ピックアップ
ながおか神輿プロジェクト

長岡みんなのSDGs
有限会社 吉澤藤兵衛

地域の“とくべつ”を守る 市民のチカラ

グローバル化によって、文化も言語も気候も何もかもが違う国の人たちが、気がつけば同じような服を着て、同じようなスマートフォンを持ち、同じような食べ物を食べている現代。万人受けする商品やサービスに価値を置く市場経済の中で、一部の人にとって特別なものはその価値を忘れられつつあり、そのひとつが地域文化です。今回は、自分たちの地域に根ざした文化を後世に残すために活動している2つの市民活動団体に話を聞きました。

団体同士のタッグで守る ～越後ながおか 語り座ネット～



「越後ながおか語り座ネット(以下、語り座ネット)」は、長岡市内を中心に日頃から「語り」や音声表現の活動をしている5つの団体*で構成されるネットワークです。互いに協力しながら地域文化の発信を行うこと、そして長岡市の民俗学研究者・水沢謙一氏が生前に収集していた昔話を語り継いでいくことを目的に結成し、一か月に一度アオーレ長岡で定期公演を行っています。

*紙芝居塾(ながおか紙芝居ドン!パラリン!)、わらべ唄あーそーぼ、藝女唄ネットワーク 葛の葉会、長岡民話の会、朗読つどいの言の葉

昔話で感じる 「地域と自分のつながり」

長く語り継がれてきた昔話には、私たちと同じ土地で生きてきた先人の生活の様子や知恵、教訓が詰まっているそう。メンバーの堤貞子さんはこう話します。「歴史上語り継がれるのは、武将や政治家など表に立ってきた人たちですが、昔話に描かれているのはその時代に生活していた“普通”の人たち。外の世界は昔と比べると大きく変わりましたが、人間は変わっていないと思うのです。そう考えると、昔話に込められた知恵や教訓は、現代を生きる私たちにも通ずるところがあるのではないのでしょうか」。

また一般的な昔話との大きな違いのひとつは、その舞台が「日本のどこか」ではなく「自分たちが今住んでいる場所」であること。例えば、腕のいい熊撃ちだった弥三郎のお婆さんが恐ろしい鬼になってしまう物語「弥三郎



語り座ネットの設立を記念して行われた公演。長岡リリックホール・シアターで、所属する全5団体がそれぞれの語りを披露しました。

ばさ鬼婆」で、鬼になったお婆さんが逃げ込んだ山は、旧北魚沼郡に実在する山だと言われています。メンバーの杉坂 明子さんは「その土地に伝わる昔話を聞くと、私たちが生きている今の地域に脈々とつながる歴史を感じることが出来ます。大人が聞けば、子どもの頃の原風景とリンクし、自分が育ったまちを思い出すのではないのでしょうか」と話します。

団体同士の総合力で 地域文化を守る

語り座ネットは、水沢氏が生前に集めた昔話をはじめとする長岡市の地域文化がこのままでは衰退してしまうという危機感から、語りや口承文化を生で聞いてもらえる機会を増やそうと結成されました。一緒にイベントを開催することで、集客率が上がるだけでなく、お客さんに色々な種類の語りを届けられたり、お互いに学びになったりというメリットがあるそうです。また定期開催しているイベントの企画運営は、各団体が交代で担当

しており、イベント開催にかかる負担を軽減できるという側面もあります。似た分野で活動している団体と協力し合うことは、地域の伝統文化を守る上で効果的な手段のひとつかもしれません。



アオーレ長岡で行われている定期公演。所属している5団体が持ち回りで、企画や運営、語りの披露を行います。

伝統を守るために 変化を受け入れる ～山古志角突き女子部～



「山古志角突き女子部(以下、女子部)」は、山古志の伝統行事「牛の角突き(以下、角突き)」を、女性の目線を活かしたグッズ販売やイベント企画で盛り上げている団体です。角突き好きが高じて自身も牛を持つようになった代表の五十嵐 明子さんが、角突きには意外にも女性ファンが多いことに気づき、女性目線で角突きをPRしたいと団体を結成。以来、小学生から70代までの県内外に住むメンバーで活動しています。

無力感を覚え、一度は心が折れたそうです。そこで見つめ直したのが利用者との関わり方でした。「利用者と支援者の垣根を超えると、徐々に自分の心もオープンになりました。すると人の本音や楽しそうな表情を自然に引き出せるようになり、自分が理想とした心を通わせた支援ができるようになりました」。

現在は地域活動支援センター事業などで障がいのある方の居場所づくりをしている「特定非営利活動法人ピュアはーと」で、リレーマラソンやライブなど様々な体験活動の企画を担当。リアルな体験を提供することで、人や社会との



角突きの日に出店している女子部のテントには、Tシャツやバッグなど牛をモチーフにしたかわいらしいグッズが並びます。

地域に対する誇りと 人とのつながり

角突きの魅力の一つは、牛がぶつかり合う音や牛に触れる感覚、牛の匂いなどの「五感で感じる非日常」です。角突きには現代の日常生活にはない感動があると五十嵐さんは言います。「角突きには、五感を揺さぶられるような感動があります。子どもだった頃、私自身が田舎で育ったため、田舎には何もないし、つまらない場所だと思っていました。でも、それは私が魅力に気づいていなかっただけ。山古志の子どもたちには『こんなにすばらしい伝統が自分たちの地域にはあるのだ』と誇りに思っていてほしいです」。

そしてもう一つは、牛を通じた人とのつながり。女子部ができる前から山古志闘牛会に関わっているメンバーの関さんは言います。「年齢や性別に関係なく、初対面でも『牛が好き』という共通項だけでわかり合える感覚があります。このつながりによって山古志を訪れる人が増え、地域の活性化につながってほしいと思っています」。

「変える・変えない」の バランス

数百年あるいは千年の歴史があると言われる角突きは元々男性が仕切っていた行事でしたが、女子部の誕生により、広報や運営

補助に女性が多く関わるようになりました。五十嵐さんによると、同じ「牛の角突き」を見ていても、性別によって魅力を感じるポイントが違うそう。女性が広報に関わることで新たな角突き魅力を発信できているのではないのでしょうか。また関さんによると、ここまで女性が角突きに関われるようになったのは、山古志闘牛会に変化を受け入れる勇気があってこそ。「これまで運営してきた方たちが大切にしてきたものを守りながら、お互いにリスペクトをもって関わっている」そうです。伝統を守っていくためには、しきりに固執せず、外部の人やアイデアを受け入れていく姿勢が大切なのかもしれません。



おそろいの女子部オリジナルTシャツを着て、角突きを見守るメンバーたち。

地域の“とくべつ”を 守っていくためには

自分たちが住んでいる地域にしかない文化は「私が住んでいる地域には、これがある」というお金では買えない誇りや、同じものを大切だと思う人たちとの深いつながりを与えてくれるもの。他の場所にはないからこそ価値があり、他の場所の人では守れないからこそ私たちが守っていく必要があるのです。まずは、イベントに足を運び、あなたが住んでいる地域の文化に触れてみませんか。そこには先人たちが残した、自分たちだけの“とくべつ”との出会いがあるかもしれません。

会話をし、日々の小さなあわせを感じていきたい。結果的にピュアはーとが誰でも集まれる地域の拠点になればうれしいです。



2023年1月に開催された「ピュアはーとライブ」の様子。当日は、ピュアはーとソング「はーと」が披露されました。

NAGAOKA ウワサのあの人にインタビュー! PLAYERS

西脇 秀和 さん

50歳/団体職員/
特定非営利活動法人ピュアはーと
1972年生まれ小千谷市出身。特定非営利活動法人ピュアはーとでは、趣味や特技を活かした運動や音楽活動に積極的に取り組んでいる。



オープンなハートでつくる 垣根を超えた人とのつながり

「もともとは内向的な性格で、学生時代は自分に興味をもってくれる人はいないと思っていました」と、昔の自分を振り返る西脇秀和さん。大学卒業後は地元企業で働いていましたが、「やりたいことを仕事にしたい」と思ったときにふと心に浮かんだのが、高齢者と関わる時のほっとした気持ちでした。「人と関わり合うこと

で充実感を得たかった。そこで、高齢者と心を通わせることができる福祉の道を志しました」。

しかしそこで待っていたのが、理想と現実のギャップ。今まで会うことのなかった重度の認知症の方や寝たきりの高齢者と初めて関わったときに、利用者に対し対等な立場で支援ができない自分に対して